

博士論文要約

自然会話における「ノダ (+終助詞)」の手續きの意味の考察 — 具現化形式と音調に注目して —

市村葉子

本論文は、自然会話で使用される「ノダ (+終助詞)」の手續きの意味を分析、考察した。現代日本語学において、ノダは説明のムード形式(寺村, 1984)とされ、すでに膨大な研究の蓄積がある。本論文は先行研究の知見を援用したうえで、「音調を伴った具現化形式は聞き手の解釈にどのような影響を与えるのか」という疑問を出発点として、既存の自然会話コーパスを用いてノダ形式の使用実態を調査し、さらに文末音調によりノダ形式の手續きの意味を分析、考察した。

本論文は関連性理論の枠組を援用し、ノダは命題そのものには関与せず、聞き手の発話解釈にかかる処理コストを軽減させるための手續きの意味を持ち、特に高次表意を制約すると考えた。そして、ノダの手續きの意味を明らかにするためには、抽象形式のみを分析対象とするのではなく、自然会話で使用される音調を伴った具現化形式(実現形式)を分析する必要があることを述べた。

まず、先行研究を基に、ノダを平叙文のノダと疑問文のノダに類型化し、さらに平叙文のノダは先行文脈から当該状況において聞き手に最も関連性があると解釈した命題に付加される「情報提示」のノダと当該状況において話し手自身に新たに登録された命題に付加される「情報受容」のノダに下位分類できることを示した。そのうえで、既存の話し言葉コーパス(BTSJ)を調査資料として自然会話におけるノダ形式の使用実態を分析した。調査の結果、文末で頻用されるノダ形式は「の(∅)」「んだ(∅)」及び「の/んだ+よ(ね)」であることがわかった。さらに、裸の常体形式は使用傾向に差がみられた。敷衍すると、「の(∅)」は平叙文の「情報提示」のノダ及び疑問文のノダとして、「んだ(∅)」は平叙文の「情報受容」のノダとして使用される傾向が示された。さらに、具現化形式の使用の性差についても分析したところ、先行研究の記述とは異なり、男性にも平叙文の「の(∅)」の使用が観察された。ただし、情報提示のノダには選択可能な形式が複数あり、女性は「の(∅)」を、男性は「んだよ」を選好する傾向があることを指摘した。

また、両形式の文末音調について日本語母語話者に対する聞き取り調査を行った結果、「の(∅)」は低接・疑問上昇調は疑問文のノダとして、低接・アクセント上昇調、低接・平坦調は平叙文の「情報提示」のノダとして解釈される傾向にあり、音調に関わらず平叙文の「情報受容」のノダとしては解釈されにくいという結果になった。一方、「んだ(∅)」の場合非上昇調は平叙文の「情報受容」のノダとして解釈される傾向にあり、「情報提示」のノダと解釈されるためには明示的上昇を伴う必要があることを示した。本論文の考察により、具現化形式、音調の違いにより、ノダが異なる手續きの意味を持つことが明らかになった。

そして、裸の具現化形式と同様に自然会話で頻用される「ノダ+終助詞」の特に「ノダね」「ノダよね」に注目してその手續きの意味を分析、考察した。両形式に注目した理由はいずれの形式も相

対する発話意図を伝達するためである。まず、既存の自然会話コーパス（名大会話コーパス）及び母語話者に対する会話の読み上げ実験により、主に女性が使用する「ノダね」の常体の具現化形式「のね」「んだね」を分析、考察した。その結果、当該形式は「の（ \emptyset ）」「んだ（ \emptyset ）」の手續きの意味を引き継いだ形式であり、「ね」は当該話題についての会話を継続させようとする態度を明示する形式であると結論付けた。疑問上昇調をともなった「のね」は相手からあいづちを引き出し、発話権を保持する、及び肯定的返答を要求する場面で選好される形式と考えられる。具体的には、相手の認知環境を修正し、談話展開の担い手として主体的に談話に参加することを明示する、もしくは自身に生じた認識の変化の妥当性を確認する機能があると考えられる。

一方、非上昇調、もしくは上昇の程度が緩い「んだね」は主に情報受容場面で選好され、相手の情報提示により、自身に生じた認識の変化の妥当性を確認、または受容した情報を自身で確認中という態度を示すことで、聞き手として会話に参加する意図を伝達する機能を持つ。そして両者の違いは音調により伝達され、その結果聞き手の発話解釈にかかる処理コストを下げると考えられる。

「ノダよね」は「んだよね」「のよね」両形式が使用されていたが、当該形式の場合、男性が「のよね」を使いにくいといった点を除くと、伝達する発話意図に差異はないと推察される。そこでより使用頻度の高い「んだよね」を用いて母語話者に対する読み上げ調査（調査Ⅰ）及び聞き取り調査（調査Ⅱ）を行った。まず、先行研究およびコーパス調査を基に、「んだよね」の用法を「確認、同意要求」「情報提示」「同意」の3つに分類し、それぞれの発話意図が使用される会話文の読み上げ実験を行った。その結果、発話意図と「ね」の音調には対応関係が見られた。具体的には上昇下降調の「ね」を伴った場合には命題の真偽について判断を求め、アクセント上昇調、平坦調の場合には、話し手自身の判断の提示、さらに「ね」が長呼された場合には話し手が当該命題について自身で確認（回想）中であることを相手（聞き手）に明示する、という傾向があることがわかった。

次に、読み上げ調査による考察を検証するため、母語話者に対する聞き取り調査を行った。裸のノダ形式と同様に、先行研究、調査Ⅰの結果を踏まえ、筆者らが作成した「んだよね」の刺激文を用いて母語話者に聞き取り調査を実施した。調査の結果、調査Ⅰの結果を概ね支持する結果となり、上昇下降調の「ね」は相手から肯定的返答を引き出すと解釈され、アクセント上昇調長呼は相手に情報提示すると解釈された。さらに母語話者の詳しい回答と自然会話での「んだよね」の使用場面を調査した結果から、当該形式を「んだよ+ね」と規定した。まず、「んだよ」で先行文脈から聞き手にとって最も関連性があると話し手が解釈した命題であることを「んだ」で述べ、「よ」を用いてそれを聞き手に受け入れさせようとする意図を聞き手に伝達する。そして、「ね」を共起させることにより、当該話題について会話を継続する意図を聞き手に伝達すると結論付けた。会話継続の方法として、例えば上昇下降調の「んだよ↑ね↓」で相手から同意を引き出す、アクセント上昇調長呼の「んだよ↑ねー」で当該命題を話し手自身で処理中という態度を示す、という意図を伝達することができる。また、当該形式が不確実情報を確実化する場面では使用されにくいことから、疑問上昇調の「ね」は「のね」同様「注目要求」として解釈される傾向にある点についても述べた。